

校長室の窓

第14-4号(16号)
2014, 7, 18
長野県蓼科高等学校長
金原 正

//// 体育館の扁額について ////

朝、校長室の窓を開けると蝉の鳴き声が聞こえるように鳴りました。梅雨明け間近、本格的な夏ももうすぐですね。

さて、今月も額についての紹介です。右の写真は体育館の正面に掲げられている扁額です。向かって右から左に「蓼科学校」、左端に縦書きで「渡邊國武」と署名があります。この額は、



初代校長の保科百助が渡邊國武に依頼し揮毫してもらったものですが、ところで、渡邊國武さんってどんな人なんでしょう？本校のお宝の一つですから、少しは知っておいた方が良いでしょう。

まず簡単な略歴から紹介しましょう。

1846年3月29日（弘化4年3月3日） 信濃国諏訪郡東堀村（後の岡谷市）で、諏訪高島藩士わたなべくにたけの家おおくましげのぶに生まれる。

若い頃は高島藩江戸藩邸に勤務しながら、洋式兵学、フランス語などを学ぶ。

1871年（明治3年）伊那県に出仕

1872年（明治4年）以降、民部省を経て大蔵省勤務。

1874年（明治8年）からは、大蔵卿（後の大蔵大臣）大隈重信、租税頭松方正義、地租改正局総裁大久保利通の下で地租改正に取り組む。その後、高知県令（後の県知事）・福岡県令などを経て大蔵省に戻り、大蔵官僚として活躍

1892年（明治25年）第二次伊藤博文内閣で大蔵大臣に抜擢される。

1900年（明治33年）伊藤とともに立憲政友会を設立。同年第四次伊藤内閣の大蔵大臣に再度就任するが、閣内不統一のため翌年には内閣総辞職。

以後政界・官界から身を引き、1919年（大正8年）5月11日死去。享年73歳



日本史の教科書に出てくる人名や用語がたくさん出てきました。明治時代の政界で重要なポストを占めた人物です。1907年（明治40年）、保科百助は彼を東京麻布の自宅に訪ね、「蓼科学校」の額面揮毫を依頼し、これを得ることができました。同年2月20日付けの書簡で、「この額面は講堂用のものであり、講堂建築の際に天井裏につるすように」（要約）と、記しています。この時期、保科は東京で筆墨の行商を始めようとしていましたが、その過程で、禅道を通じて以前から親交のあったこの大物政治家を訪ね、渡邊は彼の依頼に応えたということになります。ちなみに渡邊は、保科が亡くなった翌年（1912年、明治45年）に長野市の加茂神社境内に建てられた「五無齋百助の碑」の碑文も揮毫しています。

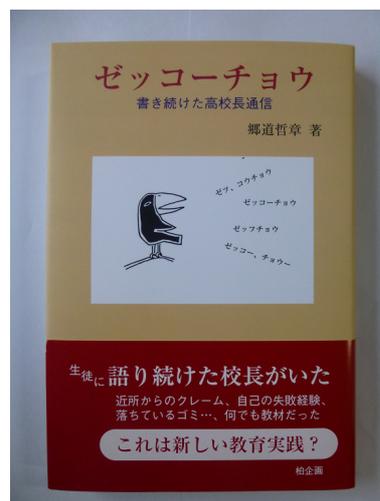
この扁額は保科の希望どおり、1922年（大正11年）10月16日、講堂の落成とともに天井に掲げられたということです。今も非常に良い状態で残されています。

～本のご寄贈をいただきました～

6月に二回に渡って蓼科学の講師を務めていただいた元明科高等学校長・元長野県立歴史館学芸部長の郷道哲章先生から『ゼッコーチョウ』をいただきました。先生が現役の校長先生だった時に書き続けた校長通信を一冊にまとめたものです。「生徒に語り続けた校長がいた」「受け取って笑い転げた生徒もいた。しかし急に考え込んだ」「生徒が校長に会うと、新しい会話が始まった」(本の帯より)。くだけた口調(文調?)の中に秘められた「深い思い」が読む人の心をつかむと思います。

もう一つは、同窓会東京支会の宮下忠爾さんから、お父上の宮下英爾さんの著書『植物歌ごよみ』全4巻をお送りいただきました。1ページに1種類の花木が取り上げられ、著者が詠んだ歌とその花木の解説と美しい挿絵がセットになっています。これはかつてSBCラジオの「ふるさとYOU」という番組で、8年以上にわたって放送されたものです。当時朗読を担当していたSBC上田放送局の岩崎信子さんが序文を書いておられます。土に生きた生活者としての目で語るユニークな植物誌です。

いずれも図書館に入れさせていただきます。夏休みに是非読んでみて下さい。



～^{はっぴ}法被を作っていました～



左から教育長さん、私、竹花商工会長さん

この度、立科町商工会と町のご配慮・ご支援により、本校のための法被を作っていただくことになり、30着をご寄贈いただきました。10日に商工会の竹花会長さんと町教育委員会の塩沢教育長さんが学校まで届けて下さいました。色は紫、襟に「長野県立科町」「蓼科高等学校」と染め抜かれ、背中には「しいなちゃん」があらわれています。早速今年の「えんでこ祭り」でお披露目をさせていただき、ポプラ祭で執行部が着て皆さんに見ていただくなど、様々なところで活用させていただきたいと思っております。

ありがとうございました。

背中には、しいなちゃん～

*『校長室の窓』は本校HPに掲載しています。写真もカラーでご覧いただけます。



***** 蓼科高校は、今もっても「旬」な高校です！ *****

最近蓼科高校が立て続けに新聞（いずれも『信濃毎日新聞』）に取り上げられました。列举してみると……

6月 5日	地域に学ぶ「蓼科学」にカー2年生の一部必修に――
6月21日	「おらほの自慢」シリーズ「笠取峠のマツ並木」 ――地域、学校…保護の輪広がりに――の中で蓼科学の取り組みを紹介
6月26日	立科町の魅力掘り起こそう 若い発想力でPR法模索 ――長野大と授業連携 県宝の石塔など巡る――
7月13日	親子そろって勝利目指す ――坂城高監督 父・栗原和之さん 蓼科高監督 長男・和馬さん――

ひと月ほどの間に4回も記事に取り上げられました。つまり、注目度がとても高いのです。いずれも生徒昇降口の掲示板に貼ってありますので見て下さい。

特に、「蓼科学」・「地域Ⅰ」の授業等、地域学の実践が注目されています。地域と連携した授業づくりは本校の伝統でもあり、「蓼科学」や「地域」はそれを継承したものと言えるのですが、そういうところにスポットが当てられるのはとても嬉しいことです。実は、「地域学」は全国的にも重視され始めている取り組みです。東京都の独自科目「江戸から東京へ」（高校）や富山県の「ふるさと富山」（小・中・高校）などの実践例もあります。グローバルな時代だからこそ身近な地域の歴史や文化について理解を深めることが大切であり、それが新たな視点で世界と自分自身を見つめ直し、世界の異なる文化を持つ人々と互いの理解を進める第一歩になるのです。それは、若い世代の力で地域を支え地域を発信する力をつけることにつながります。長野県でも「長野県の風土を理解し、地域に参加する『信州学』」を学校教育の中に取り入れていくことが提起されるようになりました。蓼科高校の実践はそうした取り組みの先駆的なものと言っても良いでしょう。蓼科高校は今まさに「旬」、さらなる進化を目指します。

***** 夏休み、戦争と平和について考えてみましょう *****

まもなく夏休みです。この時期は、8月6日広島原爆の日、8月9日長崎原爆の日、8月15日終戦記念日など、戦争と平和について考える機会です。特に、今年^{そかい}は第一次世界大戦勃発から100年、学童疎開が始まった年から70年という節目の年であり、集団的自衛権の問題も大きく取り上げられています。これからの社会を担っていく者として、是非、戦争と平和、そして命について考える機会を持って下さい。とっかかりとして、次の問から始めましょう。



終戦を伝える新聞記事

- ①1945年（昭和20年）8月15日に終わった戦争は、何という戦争ですか？
 - ②その戦争で日本が戦った戦争相手国はどこですか？あげられるだけあげて下さい。
- 簡単ですか？実はこの問い、なかなか手強い^{てごわ}かもしれません。これを出発点として一緒に考えましょう。